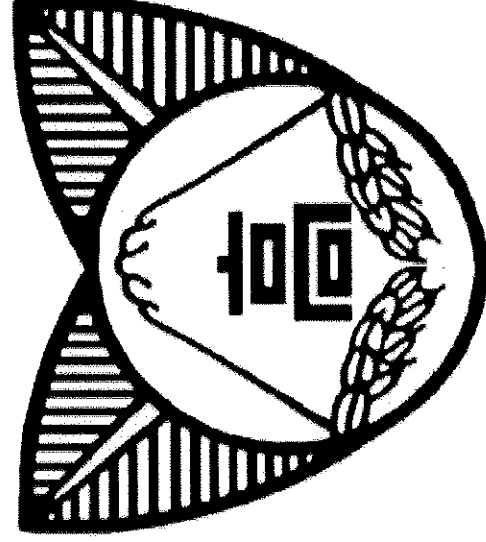


令和4年度

研修集録



秋田県立羽後高等学校

目次

巻頭言

「新学習指導要領元年」・・・・・・・・・・・・・・・・校長 平川 研

1 各教科の重点目標・具体的実践事項・改善点および次年度への課題

- ① 国語 ②地歴公民 ③数学 ④理科 ⑤保健体育
- ⑥ 芸術 ⑦英語 ⑧家庭 ⑨情報 ⑩商業・・・・・・・・ 1

2 相互授業参観・公開授業研究会

- ・ 授業研修について・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 1
- ・ 相互授業参観 授業参観シートより・・・・・・・・ 1 2
- ・ 公開授業研究会 開催要項・・・・・・・・・・・・ 1 6
- ・ 学習指導案・・・・・・・・・・・・国語科：大友佐和子 1 7
- ・ 学習指導案・・・・・・・・・・・・芸術科：佐藤 郁子 1 9
- ・ 国語科研究協議会・・・・・・・・・・・・ 2 1
- ・ 芸術(音楽)科研究協議会・・・・・・・・・・・・ 2 4

3 研修講座(A講座・B講座・C講座)

- ・ A-30 県立学校新任教務主任研修講座・・・・・・・・小野寺裕美子 2 7
- ・ A-33 高等学校新任学年主任研修講座・・・・・・・・富谷 朋子 2 8
- ・ A-36 高等学校新任生徒指導主事研修講座・・・・・・・・高橋 潤 2 9
- ・ A-42 高等学校講師等研修講座・・・・・・・・佐藤 郁子 3 1
- ・ B-13 高等学校道徳教育推進研修講座・・・・・・・・小川 卓也 3 2
- ・ C-22 「授業に生かすデジタル教材の作成」講座・・・・・・・・佐藤 郁子 3 3
- ・ C-25 「高等学校情報科におけるプログラミング」講座・・・・・・・・照井 雅孝 3 4

4 本校普通科デジタル探究コースの取り組み

(デジタル探究委員会) 3 6

新学習指導要領については、今年度の1年生から年次進行で実施が始まった。授業改善の方向としては、生徒の目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点からの改善が必要とされている。目指す資質・能力とは「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱を指している。本校のシラバスを見ると、教科の特性に応じて、この資質・能力に応じた評価規準が定められている。資質・能力の育成は、生徒が「何を理解しているか、何ができるか」に関わる知識及び技能の質や量に支えられており、「知識や技能」なしに、「思考力、判断力、表現力」を深めることや、社会と自己との関わり方を見いだしていくことは難しい。逆に、社会との関わりの中で学ぶことへの興味をもたせず、思考や判断、表現等を伴う学習活動もなければ、生徒が新たな知識や技能を得ようとはしないだろう。こうした知識及び技能と他の2つの柱との相互の関係を考えながら、発達の段階に応じて、生徒が基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得できるようにしていくことが重要だと考えている。

本校では、県の「デジタル教育未来へRUNプロジェクト」により、今年度、デジタル探究コース（デジタルビジネス探究コース）が設置された。県内4校中の一つとして採用していただき、本校では、デジタル系に強い人材の育成を目指して取り組むことにした。設置にあたり、準備期間は短かったが、教育課程を変更し、実施内容も試行錯誤して進めてきた。1年目は、地域のデジタル系企業や慶應義塾大学環境情報学部等の協力を得ながら実施した。「デジタル機器の使い方」から始まり、「ドローン」「eスポーツ」「インターネット配信」「WEBサイトの作成」「メタバース」「プログラミング」などについて幅広く学び、体験させた結果、生徒たちに興味・関心を抱かせることができたと思っている。今年度は1学年全員を対象としており、学習活動全体に対するICTの効果的な活用にもつながる取り組みとなった。計画や運営に当たった担当教員のこれまでの専門的な研修や幅広い経験があったからこそ、スムーズに実施できたのではないかと感じている。

研修の面では、次年度から、教職員の研修履歴記録の作成と、その履歴を活用した対話に基づく受講奨励の仕組みが導入される。中央教育審議会の「令和の日本型学校教育」に向け、「主体的な教師の学び」「個別最適な教師の学び」「協働的な教師の学び」といった新たな教師の学びの姿が示された。研修履歴の記録は、教職員が学びの成果を振り返り、自らの成長の実感を得ることに活用される。また、新たに挑戦したい分野を見いだし、主体的な目標設定や自己のキャリア形成につなげることが期待されている。対話に基づく受講の奨励は、管理職と対話を重ねる中で、自分の強みや弱みを把握し、今後伸ばすべき能力や果たすべき役割を踏まえ、主体的な教師の学びにつながる。このことにより「今後どの分野の学びを深めるべきか」「学校での役割に応じてどのような学びが必要か」ということを考える契機となるだろう。記録の対象となるのは、「総合教育センターの研修」「教職員支援機構や大学等の研修」「承認研修」の他、「教科・領域の研究協議会」などの校外での自主的な研修等も該当している。教職員に求められる資質として示された、「教職に必要な素養」「学習指導」「生徒指導」「特別な配慮や支援を必要ととする児童生徒への対応」「ICTや情報・教育データの利活用」を参考に進めていきたい。これからの教職員の研修が主体的で有意義に進められることを期待する。

1 各教科の

- ・ 重点目標
- ・ 具体的実践事項
- ・ 改善点および

次年度への課題

- ①国語 ②地歴公民 ③数学
- ④理科 ⑤保健体育 ⑥芸術
- ⑦英語 ⑧家庭 ⑨情報 ⑩商業

① 国語科

1 今年度の重点目標

- (1) 言語に関する基本的知識を身に付けさせ、表現や思考の基礎となる国語力を養う。
- (2) 伝え合う学習活動を通して、相手の考えを正しく理解し、自分の考えを適切に伝えることができる能力を育成する。

2 具体的実践事項

- (1) ・ 1年生では、平常点に関わる漢字小テストを授業開始時に行った。
 - ・ 2年生「現代文B」では、週末課題の範囲から授業開始時に国語常識や漢字の小テストを行った。
 - ・ 3年生「現代文B」でも、単元を範囲とした漢字小テストを授業開始時に行った。
- (2) ・ ICTを活用し、考えの共有や発表をすることで理解を深めることができた。
 - ・ 学習のまとめの段階でICTを活用することで、あまり抵抗なく自分の考えを書くことができていた。
 - ・ 密にならぬように気をつけながら、できる範囲でグループ活動や発表に取り組ませた。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) ・ ICTを活用した小テストも実施してみたが、漢字の書き取りについては筆記が不可だと感じる。
 - ・ その授業の中で「生徒に身に付けさせたい力」を明確にした授業展開を工夫していきたい。
- (2) ・ ICTと筆記のバランスを考えながら、授業計画を組み立てていきたい。
 - ・ ふだんの生活の中で使用する言葉も貧弱なため、自分の考えを伝える力はまだまだ不足している。授業の中で「考える時間」を確保しつつ表現力の育成に努めたい。

② 地歴公民科

1 今年度の重点目標

- (1) 基礎的知識を身につけさせ、自ら学ぶ姿勢を育成する。
- (2) 社会的事象を、多角的に捉えようとする姿勢を養う。

2 具体的実践事項

- (1) 電子黒板を資料集として活用した授業を展開できた。とくに、授業内容に関連する動画の視聴時間を増やした。
- (2) ペアワークの時間を増やして協働の姿勢を促したり、知識の理解を深めることができた。
- (3) 定期考査では時事問題として、大きく報道されたニュースを出題すること社会に目が向くように促した。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 電子黒板を活用して、資料を提示することについては好評だった。
- (2) 授業アンケートの様子をみると、授業全体については概ね好意的なものであったが、グループワークを求め声も聞こえてくる。グループワークを実践するための工夫が必要である。
- (3) 定期考査における時事問題へのモチベーションは低かった。社会に関心を持たせるための更なる工夫が必要である。
- (4) とにかく基礎学力を身につけたいが、中学校レベルの内容を振り返る必要があるのでも時間もかかる。教科書の内容のうち、重点的に学ぶ項目をピンポイントで押さえることも考えなければならぬ。

③ 数 学 科

1 今年度の重点目標

- (1) 学習の仕方等の指導を通して学習意欲を向上させる。
- (2) 自ら学習する習慣を身に付けさせ、考える力と問題解決能力を育てる。

2 具体的実践事項

- (1) 授業・週末課題で、基礎的な計算練習や数学パズルを取り入れ、教や計算、図形に関するの苦手意識を減らす取り組みをした。
- (2) 単元終了時や長期休業中に、スタディサプリを活用し復習問題や確認テストを実施した。
- (3) 1年生が新教育課程への移行学年となり、定期考査作問の段階で3観点の評価できるような問題になるよう、科内で協議した。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 新教育課程に対応した、年間指導計画の再編や指導内容の精選をする。観点別評価の検証を行い、評価について再考する。
- (2) 家庭学習の習慣定着と基礎学力の向上に向けた、継続した課題の提示と指導を行う。
- (3) I C T機器を有効に活用した授業実践に向けて、科内で情報を共有し、研鑽を重ねる。

④ 理 科

1 今年度の重点目標

- (1) 基本になる定理、法則の理解と定着を図る。
- (2) 観察や実験を通して主体的に学び、科学的な思考力を育成する。

2 具体的実践事項

- (1) 観察や実験、演示実験を適宜導入し、科学的に考察することで、学びを深めさせることができた。
- (2) クロムブックを利用して、調べ学習、実験動画等の視聴、レポートの作成など主体的に学ぶ機会を作ったり、興味関心を高める工夫をしたりすることができた。
- (3) 羽後町内の小学校、中学校と連携した8月と1月のワクワク理科実験教室を通して、実験・観察に対しての興味・関心を高めると共に、教員の指導力を向上させることができた。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 実験・観察は主体的に学ぶ手段として有効であるが、結果の考察や知識としての定着には大きな課題がある。実験・観察を行う前後の指導をさらに工夫しなければならない。
- (2) クロムブックを用いた調べ学習は、生徒も意欲的に取り組むが、調べた内容の正誤や適不適を判断する力を身に付けさせる必要がある。また、調べたことをそのままではなく、簡潔にまとめて伝える表現力の育成も必要である。
- (3) 地域の学校と連携した講座等は、地域の子どもたちの理科に対する興味関心を高めたり、教員の指導力の向上を図ったりする上で有効ではあるが、理科の教員が1名のみになると開催は非常に厳しい。

⑤ 保健体育科

1 今年度の重点目標

- (1) 生涯にわたって継続的に運動に親しむ資質を養う。
- (2) 健康・安全について学習したことを実生活で活用する態度を育てる。

2 具体的実践事項

- (1) 選択種目（班）ごとに、自分たちの現状に見合った目標設定とその実現に向けた計画立案を重視した。その際、クロムブックを活用して学習ノート（スプレッドシート）や日々の振り返り（フォーム）、参考動画の視聴、自分たちの動きの撮影・分析などを行わせた。
- (2) 感染症予防や生活習慣、環境問題など、身近な問題を自分たちの課題として意識できるようにするため、クロムブックを活用した意見交換（ジャムボード）や動画視聴を積極的に行った。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 生徒自身で競技会を企画・運営できるような能力を養っていきたい。
- (2) 学習内容と実生活が直接リンクするような単元もあるため、今後もより具体的な指導を心がけたい。

⑥ 芸術科

1 今年度の重点目標

- (1) 音楽の良さを味わい、教養について考える力を養う。
- (2) 音楽的に幅広い活動を通し生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てる。

2 具体的実践事項

- (1) 歌唱表現について
今年度もコロナ禍の影響でなかなか歌唱の時間を取ることができなかつたが、歌う喜びを感じながらハーモニーを味わったり、楽曲に相応しい表現を考えて歌唱することができた。
- (2) 器楽表現について
主に篠笛で和楽器の特性や奏法、地域の伝統音楽について学びながら演奏することができた。
- (3) 鑑賞について
西洋音楽、日本の伝統音楽、世界の諸民族の音楽に触れることによつて、文化の多様性や特色を感じ取ることができた。また、YouTubeの動画を活用することにより舞踊音楽の踊りやポリフォニーの仕組みなどを視覚的に確認することができた。
- (4) 創作について
作曲にタブレットのアプリを使うこととあまり抵抗感なく創作に取り組むことができた。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) のびのびと歌唱表現できる環境を整え、自主的な学習を促す。
- (2) 楽器の基礎的な奏法の理解と楽典基礎知識の継続的学習。
- (3) 音楽を通して教養について考える鑑賞教材の精選。
- (4) グループ活動の効果的な用い方を考える。

⑦ 英語科

1 今年度の重点目標

- (1) 自分の考えや気持ちやその場で考えて伝え合うことができる力を育てる。
- (2) 基礎的・基本的な知識や技能を習得させ、資格取得に努める。

2 具体的実践事項

- (1) 各レベルで自分の考えなどをまとめる活動を取り入れ、ペアやグループで発表させる活動を多く取り入れた。
- (2) 英語検定は、意識向上のため、3級以上の受験としている。
- (3) スタディサプリや週末課題、自学ノート、小テストなどを行い、基礎学力向上と自学の習慣の育成に努めた。
- (4) A L TとのT Tで英語を使用する場面を設定したり、CAN-DO リストに基づいて計画的にパフォーマンステストを実施した。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 基礎学力の定着に向けて、学習習慣の育成に努める指導を継続するとともに、既習事項を用いた output の機会を積極的に活用して定着を図る。
- (2) 県主催の英検 I B Aの結果から、英語検定の各級で合格できる力をもつ生徒が年々減少していることが判るので、まずは3級程度を基礎にして上位級に挑戦させる生徒を増やしていきたい。(今年度は準2級の合格者1名)
- (3) 学習指導要領と CAN-DO リストに沿うように、プレゼンテーションやパフォーマンステストなど「発表する活動」を計画的・継続的に実施する。

⑧ 家庭科

1 今年度の重点目標

- (1) 自立して生活を営むために必要な知識と技術を習得させる。
- (2) 多様な価値観を認め合い、協働して学習する態度やコミュニケーション能力を育てる。

2 具体的実践事項

- (1) 食物調理技術検定、被服製作技術検定の取得を目標とすることで、繰り返し実技練習やテスト勉強をしたり、授業を休まない態度を育てることができた。食物調理技術検定2級希望受検者や進度や技能が達していない生徒には放課後に個別指導を行った。また、事例や画像・動画資料をクロムブックで提示することで生活体験の不足を補って授業を進めた。今年度は、公民科の先生にTTに入っていただき、専門性を活かして授業を進めた。生徒にとっても分かりやすく、私自身も勉強になった。
- (2) クラスメイトとの協働作業やプレゼンテーション、外部講師による授業を通して、コミュニケーション能力や職業人としてのマナーを学んだり、他者から学ぶ姿勢を育てることができた。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 地域と連携した体験学習、家庭科技術検定の指導（食物・被服）について、家庭科教員1名で継続することが難しくなってきた。生徒の技能も低下しており、特に被服製作技術検定は放課後の個別指導が必要になったり、教材費がかかるため、希望受検にするか検討したい。
- (2) 生徒の実態に合わせて授業を進めると家庭基礎2単位では授業時数が足りない。家庭総合を選択して実習を充実させ、体験的に学習させたい。

⑨ 情報科

1 今年度の重点目標

- (1) 情報が現代社会に及ぼす影響について考え、理解する力を育てる。
- (2) 情報機器等を効果的に活用し、コミュニケーション能力や情報の創造力・発信力等を養う。

2 具体的実践事項

- (1) デジタル探究支援事業として、外部講師による講義を実施した。
(ZOOM、ドローン、eスポーツ、インターネット、WEBサイト、メタバース、プログラミングなど)
- (2) タイピング等の基礎的な事柄についてのスキルアップを図ることができた。
- (3) インターネット、スマートフォン、SNS、情報モラルなど、生徒が生活の中で接している事項について、様々な問題点や考え方の多様性を授業内で共有することができた。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) ICT機器の活用に合わせて、タブレットの使い方のモラル教育を図る必要がある。
- (2) タイピング、基本的な表計算、プレゼンテーション等の基本的なスキル等を確実に身に付けさせたい。
- (3) プログラミング教育について、学習内容や指導方法等を検討していきたい。
- (4) 新学習指導要領に沿った学習内容・授業展開・学習評価等を検討していきたい。

⑩ 商業科

1 今年度の重点目標

- (1) ビジネス社会の一員としての心構えや、自ら学ぶ姿勢や態度を育てる。
- (2) 商業に関わる基礎的・基本的な知識や技能を習得させ、各種検定の資格取得に努める。

2 具体的実践事項

- (1) 実社会で必要とされる心構えや知識・技術の習得に向けた授業を行うことができた。
- (2) 珠算電卓、情報処理、簿記の各検定の資格取得を目標にして、課題や小テスト等を実施し取り組んできた。
- (3) 課題研究では、地元の地域を考え、地域の活性化や地域貢献をメインとした学習活動を実施した。また、生徒個々に課題を考え、自ら調査・研究する形で授業展開した。1・2年次に羽後学で培ってきたことが活かされる良い機会となった。

3 改善点及び次年度への課題

- (1) 各種検定合格に向け生徒の意識の高揚を図る工夫、学習内容を定着させるための工夫等について講じていきたい。
- (2) 情報処理室やICT機器を用いた授業展開について、今後も工夫・改善しながら、積極的に活用していきたい。
- (3) 各科目とも新学習指導要領に沿った学習内容・授業展開・学習評価を考えたい。
- (4) 検定を目指すことだけでなく、卒業後の実社会で即活用できるような知識や技術等、より実践的な学習の場を提供できるようにしたい。

- 2 ・ 相互授業参観
(9/12～16)
- ・ 公開授業研究会
(11/16)

1. 公開授業研究会

- ①研究主題 「ICT活用により、生徒に学ぶ喜び・達成感を持たせる授業づくり」
- ②期 日 11/16 (水) 5校時
- ③実施教科 国語科、芸術科

※ 県南地区高等学校および羽後・湯沢市内の小中学校へ案内

2. 9月の相互授業参観について

- ①期 間 9/12 (月)～16 (金)
- ②実施形態
 - ・教員全員が他の先生方の授業を2コマ以上参観する。
 - ・参観に際しては、前もって参観したい授業の先生にお願いし、参観させていただく。
 - ・見学後に授業参観シートに「参考になったこと、感想等」を記述し、授業者に渡す。

※授業参観シートは研修図書情報部にも出してもらう

授業者へ

授業参観シート

月 日 曜日 校時	年	組 教科名:
-----------	---	--------

授業者: _____ 先生 _____ 参観者: _____

良かった点 参考になった点	・ ・ ・ ・
感想等	・ ・ ・

相互授業参観 授業参観シートのまとめ

実施期間：9月12日（月）～9月16日（金）

【国語】 1年 現代の国語

よかった点・参考になった点

- ・黒板と電子黒板をうまく使い分けることで、生徒の理解が深まるように工夫されていた。
- ・個々の生徒の特性を捉えた声かけや指示がされていた。
- ・指示が明確で、活動内容がきちんと伝わっていた。

感想等

- ・渡しの授業でぼんやりしていることもある生徒が、顔を上げてしっかり集中できていた。見習いたいです。
- ・「何を」「どこまで」理解させるのが難しいところだと感じる。

【国語】 3年A組 現代文B

よかった点・参考になった点

- ・各生徒に役割が与えられていて、しっかりとまとめることができていたことと、発表の機会が与えられていたことが非常に良かった。
- ・同じ箇所の解釈でも、生徒によって捉え方が違っているため、どれを聞いていても興味深かった。
- ・すべての生徒の発表に対して、先生が必ずコメントしており、見習わなくてはいけないと思った。

感想等

- ・人物や時代の背景について、先生がさらりさらりと語る様子が素晴らしく、果たして自分はこの風にできるだろうかと教材研究の必要性を痛感した。
- ・奥深くて興味がわく授業でした。ありがとうございました。

【地歴公民】 3年B組 政治経済

よかった点・参考になった点

- ・電子黒板で画像や動画を見せることで授業に変化が生まれ、生徒の興味関心を高めることができていた。
- ・生徒の身近なところから遠い世界(発展途上国)に結びつけて説明することで、理解が深まっていると感じた。

感想等

- ・生徒たちにとっては遠い世界であろう国々のことを、興味関心を持たせるように授業を進めることができるのは、教える側の先生の引き出しの多さだと感じた。
- ・生徒が耳を傾けたくなる「話し方」を見習いたいです。

【数学】 3年 数学II

よかった点・参考になった点

- ・わかりやすい例え、ゆっくりはっきり丁寧な言葉かけ
- ・タイマーを使って時間を区切ることの効果

・スタサプの活用（その間に個々の生徒に指導している）

感想等

・就職試験対策ということで、試験に出やすい問題をおさらいし、確実に得点させたいという思いを感じました。

・授業の流れ、言葉がけの仕方などいろいろと勉強になりました。

【数学】 1年 数学 I

よかった点・参考になった点

・聞く時間と板書をとる時間を分けていて、メリハリがある授業でした。

・思考する過程も板書していて、後からノートを見たときもわかりやすかったです。

・わざと間違った答えを書いて、ただ写すだけでなく考えさせるしかけをしていたところが勉強になりました。

感想等

・自然数を運動会の順位に例えたり、記憶に残る説明のしかたが勉強になりました。

【数学】 1年 数学 A

よかった点・参考になった点

・フラッシュカード的なICTの使い方。

・生徒同士が教え合うスタイルが定着している。

・できる生徒が退屈しない問題が入っているのが良かった。

感想等

・まとめプリントにひたむきに取り組む姿勢が良かった。

・数字を入れ替えてしまうと論理的思考が破綻してしまう生徒が多かった。

【理科】 3年B組 地学基礎

よかった点・参考になった点

・スライドの活用（ICT）

・班別の解答用の小さいホワイトボードの活用

・板書がきれい。わかりやすくまとめられている。

・生徒の活動（見る・聞く・書く）のメリハリ

・生徒への指示が明確だった

・作業する時間と先生の話を聞く際のメリハリがっていた。そのため、話を聞く時間の時には体を自然な流れで前に向けていた。

・作業する際のアドハイスをするタイミングが良かった。

感想等

・プレートの動きを考えするなど、生徒の活動があって楽しかったです。

・メリハリが良く、授業展開の参考になりました。

・生徒への助言するタイミングが大変参考になりました。

・授業の最初にどういうものを作るかという説明があり、完成した模型のイメージがしやすかったです。生徒も作りながら楽しんでいました。

【家庭】 1年 家庭基礎

よかった点・参考になった点

- ・認知症は他人事ではないので、真剣にメモを取ってしまいました。とてもわかりやすく参考になった。

感想等

- ・認知症の方への言葉がけの仕方など普段の授業でも役に立つと思った。

【英語】 2年 コミ英II
高橋恵・ザック

よかった点・参考になった点

- ・文法の指導では、指導者の口頭での説明が多くなりやすく、生徒の関心も薄れがちになるが、ゲームなど生徒の興味を引く指導方法に工夫がされていた。
- ・ALTとのコンビネーションが良かった。
- ・ALTの文法説明の際に、生徒の反応が薄い箇所で補足説明が入り、わかりやすかった。
- ・文法のポイントを押さえたあとのKahoot!が良かった。
- ・授業前半の「動きのある時間帯」と後半の「板書をノートにとる時間帯」で、メリハリがきいていて、飽きさせない工夫が見られた。
- ・プリントの作りが丁寧で取り組みやすそう。
- ・振り返りシートに先生の返事が書いていた。→丁寧に対応していることがわかる。
- ・何というアプリを使っているのか、大きくて見やすかった。
- ・文法のチェックが日々の授業で繰り返し行われているのが伝わり、生徒もよく反応していた。
- ・英訳の問題へのコツとして、日本語の分析をしようという指導は是非まねさせていただきたい。
- ・生徒が辞書を頻繁に使用しており、自発的な学習が素晴らしいと思いました。
- ・電子黒板に表示した英文のカッコに、手書き入力するのは漢字の答え合わせなどにも役立つと感じた。
- ・すべての生徒が授業に参加するよう工夫を凝らしてペアワークを実施している。

感想等

- ・ICTを利用した指導に熟練しており、途中で操作トラブルもなく、スムーズな授業展開でした。
- ・クロムブックは使用しないときは閉じさせると良い。
- ・本校生徒の文法に関する理解力・意欲の低さを実感した。
- ・クイズを取り入れていて、授業展開の参考になりました。
- ・テンポの良い授業で、私自身、楽しませてもらいました。
- ・英語が苦手な人たちに英語を教えるのは相当の工夫が必要なんだなと考えさせられました。
- ・ペアリングに工夫の跡が見られた。
- ・生徒を引き込む力強さが感じられる授業だった。
- ・文法や文の要素の確認はしつこいぐらいやってみようと思います。
- ・生徒への指名や発問の仕方が絶妙で、楽しかったです。
- ・授業の流れを生徒がよくわかっており、スムーズな授業展開がなされていた。
- ・単語の読み方や意味について繰り返し確認することで、基礎事項が授業時間内しつかりと定着していると感じた。

【英語】 1年 論理・表現 I

よかった点・参考になった点

- ・文法が机上の学習でなく、生活に結びついた学びで興味深かった。
- ・論理的思考につながる学びが展開されていた。
- ・学習に絡めて、生活指導が随所に見られた。

感想等

- ・論理的に考える方法が体得される授業展開だった。

【情報】 1年 情報 I

よかった点・参考になった点

- ・授業の最初にタイピングの時間を設け、スキルアップを図っている。(ほとんどの生徒が休み時間中から実施している)
- ・電子黒板を用いて、操作手順等を生徒に見せながら進めていて、学習内容がスムーズに生徒に伝わっている。
- ・合間合間に授業内容に関連する話題を出すことにより、生徒のやる気を持続させている。

感想等

- ・生徒へのしつけが行き届いていて、生徒も素直に対応し落ち着いた雰囲気の中で授業が行われている。生徒と良い関係が築かれている感じた。
- ・生徒との言葉のやり取りを見ていると、言語活動の重要性を再確認することができた。

令和4年度 公開授業研究会 開催要項

- 1 主 題 「ICT活用により、生徒に学ぶ喜び・達成感を持たせる授業づくりの実践」
タブレットや電子黒板などを用いて、生徒が主体的・対話的に学習活動に向かい達成感を得ることができるよう工夫を図る。また、授業展開において、一人一人に目を配り、個々の生徒に適した「問いかけ」や「発問」を工夫する。
- 2 実施教科 国語科、芸術科(音楽)
- 3 期 日 令和4年11月16日(水)
- 4 日 程 13:55～ SHR・清掃・準備(当該クラス以外の生徒は放課)
14:30～15:20 公開研究授業
15:20～15:50 移動・準備
15:50～16:30 授業研究協議会(教科ごと)

5 授業一覧

教科	科目	単 元	学年・組	授業場所	授業者
国語科	言語文化 3 詩歌 雪の深さを [俳句]		1 年A組	1 A 教室	大友佐和子
芸術科 (音楽)	音楽 II 創作「日本の音階を使って 祭り囃子の曲を作ろう」		2 年A組	音楽室	佐藤 郁子

6 授業研究協議会について

教科	協議会場	司 会 者	記 録 者
国語科	会議室	奥山 栄子	小松 拓史
芸術科	図書室	照井 雅孝	富谷 朋子

会次第

- ①授業者から感想・課題等
- ②授業参観者から感想・質問・意見等
- ③今後のICT活用のあり方について
(活用方法、課題、展望などを)

7 その他 ※本校教職員も国語科か芸術科のどちらかの授業を参観し、その後の授業研究協議会にも参加する。

※湯沢地区の小・中学校・支援学校、県南地区の高等学校にご案内します。

国語科（言語文化）学習指導案

日時：令和4年11月16日（水）6校時
 場所：1年A組教室
 対象：普通科1年A組（25名）
 指導者：大友佐和子
 教科書：「新編言語文化」（東京書籍）

1 単元名 3 詩歌 雪の深さを【俳句】

2 単元の目標

- (1) それぞれの俳句を鑑賞し、ことばに対する感覚を磨き、語彙を増やす。 【知識及び技能】
 (2) 俳句に表現されているものの方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈する。 【思考力・判断力・表現力】
 (3) 俳句を詠み、作品を「新俳句大賞」に応募する。 【学びに向かう力、人間性等】

3 単元について

(1) 単元観

本単元は、高等学校校指導要領の「C読むこと」の「(1) イ作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈すること。」及び、「B書くこと」の「(1) ア自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。」、「(2) ア・・・感じたことや発見したことを短歌や俳句で表したり、・・・」を踏まえて設定した。

十七文字で詠まれる俳句は、特にことばそのものを意識することができ、俳人の言葉の捉え方や、言葉の拾い方に注目するよう意識させやすい。また、俳句の鑑賞をとおして他者のものの方、感じ方、考え方をとおして、自己の表現の幅を広げることも散文に比して取り組みやすく、気負わず作品を詠むことができると考える。

(2) 生徒観

男子119名、女子6名の普通科クラスである。授業態度は真面目で積極的だが、自発的に学習に取り組むことは難しい。中学生程度の語句の学習を繰り返しても定着しない生徒が多く、普段使用する言葉も貧弱なため、会話は断片的である。授業でも自分の考えをまとめて発表することが難しい生徒が多い。

(3) 指導観

生徒が主体的にことばに向かい、より多くの語彙を獲得するために、ジャムボードやフォームを利用する。最終的に、投句を通して自己の表現内容と他者の解釈を組み合わせ、自己の表現を見直してより良い作品づくりにつなげ、伊藤園の新俳句大賞に出品する。

4 単元計画（5時間）

- 1 時間目 他者との対話から、自分のことばに対する感覚を認識する。
 2 時間目 ことばに注目しながら、教科書に掲載している俳句を鑑賞する。
 3 時間目 俳句を詠むためのルールを確認し、俳句のつくり方を学ぶ。
 4 時間目 俳句をフォームに投句し、句会をとおして自分のことばに対する感覚を磨く。（本時）
 5 時間目 応募する俳句を推敲する。

5 単元の具体的な評価基準

ア 知識及び技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増やし、それらの文化的背景について理解を深め、文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。 (1) ウ 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知識や体験の中から適切な題材を決め、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現したいことを明確にすること。 (1) ア 	<ul style="list-style-type: none"> ウ 主体的に学習に取り組む態度 <ul style="list-style-type: none"> ・他者の作品のものの見方、感じ方、考え方を参考にすることで、自己の詠みに生かす。 ・ことばを意識して俳句を詠み、作品に応募する。

6 本時の計画 (第4時)

(1) ねらい 俳句の鑑賞をとおり、他者のものの見方、感じ方、考え方を参考にして、自己の表現の幅を広げる。

(2) 展開

段階	学習活動	指導上の留意点・教師の支援	評価の観点及び方法
導入 2分	1 本時の学習内容を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">句会をとおり、ことばに対する感覚を磨き、自己の作品を生かそう。</div>		
展開 47分	2 ワークシートに記録した秋の季語を確認する。 3 秋の季語を用いワークシートを参考にしてジヤムボードで俳句をつくる。 4 出来た俳句について、グループで鑑賞会をする。 5 自分の俳句を推敲し、フォームに投句する。 6 フォームに投句された作品から上位2句を選び、選んだ生徒に理由を発表してもらう。 7 選ばれた作品を投句した2名の生徒に、俳句に詠もうとした事柄を説明してもらう。	・前時にメモした季語を確認し、本時の俳句作りに利用したい季語を選ぶよう指示する。 ・俳句をつくれぬ生徒には手助けする。 ・作者が詠んだ内容を発表し、聞き手は使われたことばが内容を適切に表現しているかを確認する。 ・ことばの使い方の良いところや、情景・描かれた人や生き物の行動などに着目し、良いところも挙げられるよう指示する。 ・聞き手のアドバイスを参考にして推敲させる。 ・選んだ理由として良いところを挙げて発表するように指示する。 ・発表者は全員に聞こえる声量で話すように、聞く人は発表者の方を見て聞くように指示する。 ・作品の内容を説明し、特に工夫した点や使用した語句について発表するように指示する。	【書くこと】 秋の季語を利用して、集めた材料のよさや味わいを吟味して、表現している。 【読むこと】 他者の作品のものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈している。
まとめ 1分	7 本時のねらいが達成できたかどうかを振り返る。 8 次時の確認をする。	他者の発表を聞いて、自分の作品を推敲してみるよう促す。 次時の授業内容を予告する。	

芸術科（音楽Ⅱ）学習指導案

日 時：令和4年11月16日（水）6校時
 場 所：音楽室
 対 象：普通科2年A組（22名）
 指導者：佐藤 郁子
 教科書：教育芸術社 MOUSA 2

- 1 題材 創作「日本の音階を使って祭り囃子の曲を作ろう」（表現A 創作）
- 2 題材の目標
 - (1) タブレット（クロムブック・クロムミュージックラポ SONGMAKER）を使い篠笛で吹くフレーズの創作に取り組む。（音楽への意欲・関心・態度、技能）
 - (2) 日本の音階について理解し、自分の意図するイメージを効果的に表現できるリズムやテンポなどを思考し、工夫する。（思考・判断・表現）（知識・理解）

3 題材と生徒

(1) 題材観

本題材は、高等学校学習指導要領ⅡのA表現（3）の創作「ア 創作表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、個性豊かに創作表現を工夫すること」を受け、日本の音階の特徴を知り、生徒それぞれが個性を生かし創作できることをめざし設定した。

(2) 生徒観

男子11名、女子11名で全体的に音楽の知識や経験値が不足しており、自信の無さからか、やや消極的ではあるが素直に学ぼうという姿勢が見られる。女子よりも男子の方が積極的で歌唱好きである。

(3) 指導観

音楽の基礎知識が不足している生徒にとっても高い壁だと思われる。昨年学習した篠笛（民謡音階になっている）や、カラフルな図のように音が並ぶアプリを使って、その壁をなるべく低くし、まずは「音をいじること」から生まれるプリミティブな面白さに気づくこと、次の段階として自分の思いを表現につなげることを目指した。

4 指導の計画

(1) 題材の評価基準

A 音楽への意欲・関心・態度	B 音楽表現の工夫（思考・判断・表現）	C 音楽表現の技能（技能）	D 鑑賞の能力（知識・理解）
音階の特徴を理解し自分の持つイメージを表すのに適したリズムやテンポ、反復などの音楽の諸要素を使い、主体的に創作に取り組んでいる。	音楽を形づくっている諸要素を理解しながら表したいイメージに近づけるよう意図をもって創作している。	反復・対照などの構成を工夫し、イメージをもって創造的に音楽を作るために必要な技能を持っている。	お互いの作品を聴いて感受したことを言語化するができる。

(2) 題材の指導計画

創作 (全12時間)

- 0時 夏休み課題「1学期に学習した日本の音階の中から好きなものを選び作曲する」
- 1～4時間 提出された課題に対する指導
- 5～8時間 篠笛の実技と創作の練習。沖繩音階の曲のタブレットでの創作
- 9～12時間 篠笛リレー奏に向けての実技練習。沖繩の曲発表 (本時3/4)

5 本時の計画

(1) ねらい

- ・篠笛で演奏する曲をタブレット上で作ることでリズムや音型などの理解を深めることができる。
- ・自分たちのイメージを表現するのにふさわしいリズム、テンポ、音型を思考・判断し演奏実技に反映させることができる。

6 本時の計画 (第4時)

- (1) ねらい 俳句の鑑賞をとおり、他者のものの見方、感じ方、考え方を参考にして、自己の表現の幅を広げる。

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	前回発表した沖繩の曲を見ながら本時の目標を確認する。	目で見ながら創作技法のふり返りをさせる。	
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ・SONGMAKERで太鼓のリズムを作る。 ・個々に篠笛のフレーズをタブレット上で作成し実際に篠笛で吹いてみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・設定ミスがないようお互いに確認させる。 ・自分たちの班の曲調の方向性を考えさせる。 ・フレーズを作るヒントを与え、開始音などのルールを決めて作業開始させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・音価などを理解し、タブレット操作ができる。A ・表現したいイメージに近いフレーズを考えられる。B
<p>本時の目標：SONGMAKERで曲を考えさせ、篠笛の演奏実技につなげる</p>			
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が作ったフレーズの中から班のコンセプトに合うものを選び1小節目から通して班でリレー奏する。 ・リレー奏の感想。 		

A 意欲・関心・態度

B 思考・判断・表現

C 技能

D 知識・理解

令和4年度 公開授業研究会

国語科研究協議会 15:50~16:30 (会議室)

授業者 大友 佐和子
司会 奥山 栄子
記録 小松 拓史
参加者 高木 厚、高橋 潤、小川卓也、
佐藤絵里子、松井智彦、(沼田善之)

1 授業者から感想・課題等

- ・ 授業参観ありがとうございました。前任校では電子黒板だけでほとんどchromebookを使用していなかった。この一か月で使い方を学んで臨んだ。
- ・ ICTは道具として使うというよりは、目標達成のため。思っていることが言葉としてでない。この目標設定をした。俳句であれば、言葉に対する意識を高められると感じ、俳句を用いた。「ご飯・めし・ライス」の違いを考えさせるところからスタートした。問題なかったが、「秋」から連想する言葉が出てこなかった。
- ・ 頭に浮かんだもので俳句を詠む。
ICT→季語・語句検案 (chromebook)
対話的で深い学びをするための道具 (jamboard・forms)
- ・ 手書きが苦手な生徒も入力することに抵抗なく取り組むことができた。対話をうながすことができる。しかし、経験に基づいて言葉を選ぶことが難しい生徒は、ICTで情報を得るだけでなく体験することが大切だと感じている。
- ・ タイピングの時間が多く、書くという作業が少ない。この時間を削らずにICTを活用できれば。

2 授業参観者から感想・質問・意見等

参観者より

- 高木：日本語を扱うにあたってchromebookは使にくい(横書きのため)。黒板の板書が電子化するだけでなく、他のICT活用法を知るために参観させてもらった。
- 高橋：学ぶには、俳句や短歌、詩とても良い教材。皆で共有するためにjamboardはなにおいしい。自分で「季重ね」に気づいた生徒もいた。
- 初めchromebookを使い、他の国語の授業でどう扱おうと思っているか？
- 大友：本校では難しいが、文章の添削・推敲には使えらると思う。先生と生徒、生徒同士の共有が可能である。
- 佐藤絵：生き生きと活動していて、授業の雰囲気も良かった。
- 小川：全員俳句ができて良かった。グループごとにjamboardに俳句を書いて共有できるのが良かった。他の班の句も見たりしている子もいて、生徒もうまく使いこなしていた。
- Formsのメリットは速報性。活用できていたと思う。
- 大友：季語を選んだらワークシートの進み具合(「俳句の作り方」)を教えてほしい。
- 高橋：教師の話が多くなるより、生徒の話や考えの時間が多くの方が学習に費やす時間が多くなる。これができていた授業だった。生徒が立派にやっていた。
- 松井：自分もICTを体育で扱うが、国語は扱いきれないと思った。しかしそれができていたので、勉強になった。生徒の頭が動いている授業になっていた。国語はやはり書かないといけない科目だとは思っている。書くことに関してのアプローチなどのICTが活用できればより良いと感じた。
- 奥山：本校の生徒に正直俳句の授業は厳しいと最初は思った。しかし、順序だてて丁寧な授業をしていただけで時間を重ねるうちに形になっていったと思う。俳句をやったことで、生徒の言葉の引き出しが少し増えたのではないかと。俳句の出来の良し悪しは別として、生徒はよく頑張っていたと思う。

3 今後のICT活用のあり方について（活用方法、課題、展望など）

活用方法

- ・辞書が変わる検索機能
- ・手書きが苦手な生徒の発表として活用
- ・意見の共有 (jamboard)
- ・回答の速報性 (Forms)
- ・文章の添削や推敲

課題

- ・ICTは情報を得るものとして有効だが、体験・経験を積むという点では足りない部分がある。
- ・書くという作業が少ない。

展望

- ・書くことに関するアプリやタッチペンの活用ができれば、ICTでも書く時間を確保できるのではないか。



4 他の授業参観者から感想・意見

[授業を参観しての感想・意見]

- ・生徒の授業に臨む姿勢や規律がとても保たれ、普段のご指導がしっかりされており感じました。生徒もchromebookに使い慣れているようで、スムーズに進んでいた印象を持ちました。
- ・他教科の先生方も、授業参観しながらも生徒と関わり、みんなが授業を作っている雰囲気がとても温かく、良いなと感じました。
- ・内容に関して、グループによっては活発に俳句ができていたところとそうでないところがあったので、複数俳句を作成して鑑賞するのであれば、1句は宿題にしてきてもいいのかなと思いました。そうでなければ、「グループで俳句を例えば2句作成して推敲し、それをフォームに投稿する」でもいいのかなと感じました。(投票するときに選択肢が多かったのと、少し似たようなものもあったこと、画面で一覧を見ると、やはり見にくいかなと思っただけで…)今回はお茶に応募しようというの目的というかモチベーションかなと感ずいて、全員応募するのは叶わないことかとは思いますが…。
- ・自分も使用してはいますが、フォームを積極的に利用していたのが新鮮でした。スプレッドシートをテレビに表示させておけば、リアルタイムに投票や理由などが表示されるのは自分では思いつかないアイデアでしたし、もっとシンプルにフォームを使えばいいなと感じました。自分の様子

[ICT活用のあり方について]

- ・1年生5クラスを担当しています。毎時間タブレットは用意させ、調べさせたりクラスルームで「課題」や「質問」を使って問いに答えたりするようになっています。課題であればリアルタイムに教員側は進捗状況を把握できるし、質問であれば回答後に生徒同士で回答を見合うことができますので、簡単な発問や理解度を測る発問の時にはよく利用します。
- ・Jambordも利用しますが、どうしても共同編集だとまだまだ本校の1年生は幼く、他のグループの邪魔をしたり、誤って他の人の物を消してしまったりとスムーズに進みません。(なので、今回の羽後高校さんのような使い方がしっくりできると素晴らしいなと感じました。自分の様子問題だと思いませんが…)
- ・課題はやはり、タブレット使用の様です。制限をかけたたり細かく巡視をしたりというのがITでないと無理なので、もう少しモラルというか適切に使えるといいなというのが実感です。(もちろん、きちんと使っている生徒が大半ですが)
- ・情報提供になるのかわかりませんが、湯沢西小さんがモデル校で使っている「ロイロノート」というサービスに個人的には興味を持っています。有料ですが、授業ツールとしては秀逸で、それ以外にもネット使用のコントロールやコミュニケーションツールとしても使えるところもあれば、授業で使用するにはとても適していると思っと思っています。自治体で導入しているところもあり、県全体でもかゆいところに手の届かないGoogle以外にもこういうツールの導入も検討していただけだと個人的には思っています。

- ・生徒全員が参加していることを感じた楽しい授業でした。ジャムボードやフォームを使い、スプレッドシートにまとめると、ICTをうまく活用していたと思います。
- ・自分の作品を見てもいい、同時に他人の作品を鑑賞することで、自分の作品を修正(考えの再構築)することにも繋がりが、考えがより深まるのではないかと感じました。
- ・気に入った作品を選ぶ際、音だけではなく、使っている文字(漢字)も感じながら選べれば良かったのではないかと思います。後ろからスプレッドシートはよく見えなかったようなので。
- ・作品を応募するという試みも、生徒の動機付けとして良かったと思います。選んだ人も選ばれた人も、しっかりと意見を述べられていました。最終的にどのような作品が応募できるのか興味があります。

令和4年度 公開授業研究会

芸術(音楽)科学研究協議会 15:50~16:30 (図書室)

授業者 子 孝 子
司会 藤 郁 子
記録 照 雅 朋
参加者 富 谷 子
篠木 聡、高階和也、高橋 恵
佐藤美沙都、小林朗子、(高橋一枝)

1 授業者から感想・課題等

- ・音楽科でのICTの有効な活用の仕方を模索中である。私自身は「音楽はアナログ」という認識があるので、篠笛の演奏とICTの融合を試みた。音楽の知識がなくとも作曲できる低年齢層向けの作曲ソフトを活用した。
- ・時間配分が予定どおり行かず、時間を掛けすぎてしまった。学習内容も難しかったかもしれない。音楽的な理論が解っていないと、タブレットにリズム・音符を並べることが難しいことがわかった。楽しんで生き生きと活動するところまでいかなかった。
- ・作曲する際はリズムがある作曲しやすいので、昨年度授業で扱った西馬音内盆踊りの太鼓のリズムを使った。

2 授業参観者から感想・質問・意見等

佐藤美：音楽とICTを融合した新しい授業を体験させてもらった。タブレットでの作曲は楽しそうだった。ただ、力量以上の曲ができてしまい、篠笛での演奏が難しそうだった。西馬音内盆踊りにも使われる篠笛を使うことはよい経験になると思う。

小林：作曲ソフトを使うことで、楽譜が読めなくても作曲が楽しめると思う。実技科目は生き生きしていた。グループ分けが普段一緒にいるメンバー同士ではないのが意外だったが、どのようにしてグループ編成をしたのか？

佐藤郁：座席順で偶然できたグループだが協力で活動している。

高橋：楽しい授業だった。担任として、普段とは違う新たな一面を発見することができた。導入で生徒が作曲した作品の投票結果を発表して、生徒を惹き付けていたのが良かった。グループ発表の際に、礼をしたり、拍手をするなどの指導があると良かったと思う。また、作曲ソフトのテンポや拍子の見方が音楽に詳しくない人には難しかったと思う。目標の「自分の意図するイメージを効果的に表現できるリズムやテンポなどを思考し、工夫する」というのは授業のどの場面だったのか伺いたい。

佐藤郁：前時に、自分が意図する祭のイメージに合ったテンポで作曲し、曲名を付けていた。前時の説明が抜けてしまった。

篠木：ソングメーカーに授業で触れたことで、興味を持った生徒は深めていくことに繋がると思う。意味のある授業だったと思う。協働して活動し、和気あいあいと笑顔に溢れていた。

高階：自分の高校時代とは違った楽しい授業だった。実技科目として、自分だったらこの場面でどのように関わろうかという視点で参観させていた。実技科目はグループ内でコミュニケーションを取れない生徒が浮き彫りになるが、発表時もみんなが視線を寄せて寄り添っていた。また、音楽に限らず技術はすぐには身に付かないが、ソフトを使うことで学びの助けになっていた。発表やテストで見えてこない部分をどのように評実技科目の評価について質問したい。発表やテストで見えてこない部分をどのように評価しているか？

佐藤郁：実技科目は発表までの授業、創作過程のほうが長いので授業への取り組みも評価している。協力して活動しているか等、良い面に目を向けるようにしたい。

富 谷：音楽の知識、演奏、鑑賞がすべて含まれた授業だった。和楽器と洋楽器を組み合わせた演奏も新鮮だった。生徒がタブレットで作曲するよりも篠笛で吹いてフレーズを作る方が簡単だったと話していたが、曲を譜面に起こすことは難しいし、作曲した作品を残しておいて次時に繋げられる点で作曲ソフトは有効だと思う。

3 今後のICT活用のあり方について（活用方法、課題、展望など）

体育科：授業の最初と最後に録画したのを見て変化を振り返らせる。



英語科：カフートや翻訳機能、オンライン辞書を活用している。

地歴公民科：電子黒板で映像教材や音源をすぐに出せるようになり便利。

家庭科：被服実習や調理実習の実技動画をクラスルームに送り、予習や自主練習に活用させる。

ハンドボール部：動画編集ソフトを使って、自分のプレーだけ抜き出して確認できるようにしたり、フォームの振り返りをする。



4 他の授業参観者から感想・意見

- ・各自でフレーズを作るという活動は、とても難しいのではと思っていました。生徒たちが課題を理解して、意欲的に取り組んでいました。グループの編成に男女差、人数差があり、それも生徒の興味関心などによるものだろうと想像しましたが、とても親和的に活動している様子が伺えました。
 - ・小学校・中学校では、グループ活動をさせるときに、その意義について十分に考え、授業に取り入れています。「教え合い」「学び合い」「伝え合い」などのねらいをもって授業活動を展開していきます。高校ではどのようなことをねらいにしているのか、伺いたいと思っていました。
 - ・篠笛の技能は、個人差はあるものの全員が習得していると感じました。昨年度からの積み重ねだと感じました。幅広い音楽文化に触れるという点で、とても興味深く拝見しました。
 - ・課題の確認、時間の設定、学習のまとめなど、全てが先生の説明で行われていたが、黒板に記入する、学習カードを活用する、などの手立ては必要ないのかと考えました。
 - ・ICTの活用については、『さすが高校生』と感心しました。小・中・高と連携した指導が必要なのだと思いますので、小学校でやるべきことをしっかりと指導していきたいと思います。
 - ・私たち小学校の教員が高校の授業を参観することは、ほとんどありませんでした。小・中・高の職員間で互いに授業参観をし、「子どもを知る」ということはとても大切なことだと思っています。ぜひ、小学校の授業も参観いただく機会があるといいかと思いません。
-
- ・とても楽しく、興味深い授業でした。作曲と聞くと、とても難しいことのように感じますが、ソングメーカーを使うことでそのハードルをかなり低くしていると思います。また、自分で曲を作ることに生徒は楽しさを感じることができただけではないでしょうか。
 - ・自分の作った音階でも、いざ演奏してみると吹くのは難しいと分かったり、演奏してみてもリズムを変えてみたりと、生徒それぞれの独創性が引き出された授業だったと思います。
 - ・班内で選ぶ際にはお互いに鑑賞したのでしょうか。授業の中で、他の人の意見（今日の場合は作品）を聞いて、自分の意見を再構築することで深い学びに繋がるのだと思っています。
 - ・指導案の中に、プリミティブという言葉がありましたが、先生の場合どのような意味で使ったのでしょうか。各班の完成形を聞いてみたいと思いました。

3 研修講座

• A 講座

県立学校新任教務主任研修講座
高等学校新任学年主任研修講座
高等学校新任生徒指導主任研修講座
高等学校講師等研修講座

• B 講座

高等学校道徳教育推進研修講座

• C 講座

「授業に生かすデジタル教材の作成」講座
「高等学校情報科におけるプログラミング」講座

県立学校新任教務主任研修講座に参加して

教諭 小野寺 裕美子

1. 新任教務主任研修講座Ⅰ

期 日：令和4年5月27日（金）

場 所：秋田県総合教育センター

内 容 ・ これからの秋田県学校教育と教務主任への期待（講義）
・ 学校における組織マネジメント（講義・演習）
・ 教務主任の職務と役割（実践発表・講義）

感想・まとめ

これまで聞く機会がなかった、本県教育の現状や教育施策について触れることができ、自分自身の視野を広げるよい機会となった。教務主任として、職員集団をリードしていく立場になったが、様々な教育活動をスムーズに進めていくためには、自分自身がアンテナを高く張り、観察力を向上させていく必要があると学んだ。
急に变えることは難しいと思うが、少しずつでも意識しながら持っている力を高めていきたいと考える。

2. 新任教務主任研修講座Ⅱ

期 日：令和4年9月7日（水）

場 所：秋田県総合教育センター

内 容 ・ カリキュラム・マネジメント（講義・演習）
・ 教務運営に関する課題と解決への取組（協議）
・ 学校運営に生かすコーチングマインド（講義・演習）

感想・まとめ

今回の研修では、課題の把握とその解決に向けての取組について考えることができた。他校の先生方との情報交換の時間もあり、それぞれの学校における課題を聞くことで、課題解決の必要性について意識を高めることができたと感じている。「新型コロナウイルス感染症への対応」、「ICT機器の活用」、「観点別評価」については多くの教務主任が課題として挙げていた。他校での取組などを参考にしながら、本校の教育活動にも活かしていきたいと思う。

また、午後のコーチングマインドについての講義は内容の濃いものだった。この考え方は、周囲の職員に対してだけでなく、生徒に対する指導の際にも活用させることができると思った。周囲の職員・生徒の能力をさらに伸ばすことを目指し、様々な視点から問いかけを実践することで、本校がより良い集団となるよう努力していきたい。

高等学校新任学年主任研修講座に参加して

教諭 富谷 朋子

1. 新任学年主任研修講座Ⅰ

- (1) 期 日 令和4年5月13日(金)
- (2) 場 所 秋田県総合教育センター
- (3) 内 容 <講 義> 望まれる学年主任像と学年主任の役割
<実践発表> 学年経営の実際
<協 議> 学年経営における課題への対応
- (4) まとめ 学年主任を務められた先生方の経験談から多くの学びが得られた。学年主任は、担任の先生の立場に立って考えること、生徒・保護者・学年部の職員はその都度違うのだから前例踏襲ではなく学年部の職員と一緒に良い方法を探していくこと、指示や命令を傳達するだけでなく、なぜそうするのか、意味を考えて伝える必要があることを学んだ。複数の学級担任の方針を汲みつつ学年をまとめることの難しさを感じた。

2. 新任学年主任研修講座Ⅱ

- (1) 期 日 令和4年6月23日(木)
- (2) 場 所 秋田県総合教育センター
- (3) 内 容 <講義・演習> 生徒指導における学年主任の役割
<講義・演習> 学年経営と組織マネジメントの基礎
<講 話> 思春期の揺れと成長を共に歩む
- (4) まとめ いじめや不登校の対応について、他校の先生方と情報交換する時間があった。参考になる具対策を共有したり、主任としての苦勞を分かち合うことができて有意義だった。講話「思春期の揺れと成長を共に歩む」では、最近の子ども達は感情が育っていないという話があった。子どもの感情を育てるには、子育ての段階で保育者が子どもの情動や感情に適した「ことば」を掛けてあげること、感情を言葉で伝えられるようになること、感情を統制する力を身につけるためにはネガティブな感情に蓋をせず、受け止めてもらう必要があることを学んだ。多忙な中でも心にゆとりを持ち、思春期の感情や悩みを受け止めて生徒の気持ちに寄り添ったことばを掛けてあげられるように努めたい。

高等学校新任生徒指導主事研修講座について

生徒指導主事 高 橋 潤

1 高等学校新任生徒指導主事研修講座の日程

I 期

- (1) 期 日 令和4年5月13 (金)
- (2) 場 所 秋田県総合教育センター
- (3) 日 程 9:30～10:00 受付
 10:00～10:10 〈オリエンテーション〉
 開講挨拶
 10:15～12:00 〈講義〉
 生徒指導主事の役割
 13:00～14:30 〈講義・演習〉
 チームで取り組む特別支援教育
 15:15～16:15 〈講義・演習〉
 事例を通じた生徒理解と対応

II 期

- (1) 期 日 令和4年9月18日(金)
- (2) 場 所 秋田県総合教育センター
- (3) 日 程 9:15～10:00 受付
 10:00～12:00 〈講義・演習〉
 いじめなど問題行動の理解と校内研修の進め方
 13:00～16:15 〈講義・演習〉
 災害や事件・事故発生時における心のケア

2 研修内容

< I 期 >

○ 〈講義〉生徒指導主事の役割

この講座では「生徒指導主事の役割」、「秋田県の現状の課題」、「生徒指導体制と連携」について学んだ。特に生徒指導提要の改定について基本的な考え方を確認できた。生徒指導主事として、管理職である校長の方針と教職員の取り組み方について、連絡調整役としての重要性を改めて実感した。さらに、校内だけでは対応困難な問題が発生した際は、スクールソーシャルワーカー(SSW)に相談するなど、関係機関との連携も有効であることを知った。

○ 〈講義・演習〉チームで取り組む特別支援教育

ユニバーサルデザインの研修で、特別支援教育についての知識は大まかに既習済みであったので、特に新たな研修事項は無かった。多くの事例を教示していただいたが、特別支

援学校での指導方法が多く、もう少し高校側に立った実践例や、対処・対応方法を紹介して欲しかった。

○〈講義・演習〉事例を通した生徒理解と対応

アドラーの行動目的論を基にした生徒へ対応への講義と演習であった。昨今、各家庭での生活習慣が多様化しており、またそれを寛く認知するという現代社会の風潮と相まって、その環境下で育った生徒の「性格」、「習慣」、「適性」、「特性」なども益々多様化している感が強い。これまで問題ないと感じていた生徒理解も、教師が生徒に期待しているレディネスの程度に乖離があるように思われる。そのギャップが現代の生徒理解の難しさになっているように思えた。

演習では、仮想の事例問題を各高校の先生方で考え合って、対処、対応、対策を立案し、グループ毎に協議した内容を発表することで色々なスキルを学べた。実践的で有益な演習であった。

< II 期 >

○〈講義・演習〉いじめなど問題行動の理解と校内研修の進め方

今年度早々、秋田県教育委員会より「いじめ相談」に関する通知により、本校での組織対応の在り方と、より実践的な対応を再構築した。初動の重要さと生徒・保護者への対応を指導部と管理職とともに検討した。自身もその検討を通じて、各都道府県教育委員会の取り組みなどを調査し、本校版の組織対応を確立できた。このような意味でも、今回の研修は自身の知識を復習することで確信を得られる研修となった。

この研修では「いじめに関する自己点検」を行った。事前に自己研修していたおかげで全て正解であったが、何の研修もしていなければ、経験年数の多い教師ほど自分の過去の経験による判断で対応し、結果として後手になったり他の不要なトラブルを引き起こしかねない。このように、特に初動対応の判断を求められやすいベテラン教師の意識改革が一番悩ましい問題であるように思われる。幸い、今年度は自身が提案した事前指導を幾つか実行させただけ、未だ停学等の処分に至るケースは無い。今後油断せず、現況に合った対応を求めていきたい。

○〈講義・演習〉災害や事件・事故発生時における心のケア

東北医科歯科大学医学部 精神科学教室の福地 成先生による講義と演習であった。研修内容は主に災害や事件・事故が発生した時とその後生徒に起こる精神的なストレスへの対応を研修した。

「緊急時のこころの反応」の講義では、時間経過に見る「こころの変化」を紹介してもらった。事例説明を受けて改めて生徒の反応に対して腑に落ちる点が多くあった。これは、災害や緊急を要する場面などは、普段の平穏な日々の下では意識して考えたことが無かった。それで、有事の時の教師としての何をどのように対処・対応すべきかを知ることができた。特に印象に残ったのは生徒の相談を受ける際の「傾聴の仕方」であった。傾聴する前に教師側からは「5つのステップ」を踏まなければならないということを初めて知った。これまでは相手の話にならずきながら全てを受け入れながら聴くという「よく言われている方法」であったが、不安や恐怖心を抱える生徒の気持ちに真に寄り添うためには、当該生徒の視点や気持ちをおこれまですら探り出していかねなければならなかった。今後、生徒の相談を受ける際に留意するポイントを知ることができた。

< おわりに >

数十年前の生徒指導が色々と通用しなくなってきたことを実感した。生徒を取り巻き環境の変化、今の社会が求める個人の権利や価値観など、「改革」を意識して対応できるようにしたい。

高等学校講師等研修講座を受講して

講師 佐藤郁子

1 概要

日時 令和4年4月26日(火) 10:00~16:15
場所 秋田県総合教育センター

2 研修内容

- ・教育公務員の服務(講義)
- ・学校組織の一員として-組織人の基本-(講義・演習)
- ・「あきたのそこちから」を活用した授業づくり(講義・演習)
- ・人間関係づくりについて(講義・演習)など

3 感想・反省など

- ・学校公務員の服務については、責任の重さ感じたが、そのような重責を担う者が違反してしまふ事例が絶えないのはなぜか。受講者全員が対策を考えた。
- ・学校組織の一員として-組織人の基本-では、「我々の仕事は1人ではできない」ということを念頭に置き、「PCDA(授業に反映できる)、ホウ・レン・ソウ、コミュニケーション」を大事にすることでスムーズに仕事ができるということを学んだ。
- ・「あきたのそこちから」を活用した授業づくりでは、生徒を惹き付ける授業のヒントを指導案や黒板やノートの使い方など具体的に提示していただいた。早速試してみたいと思う内容だった。
- ・人間関係については、ダウンポジション、アップポジションを柔軟に使い分け、非言語コミュニケーションを大切にして信頼関係を築いていきたいと思った。アイス・ブレイクの演習では、初対面の他校の先生たちとカードを使った自己紹介ゲームがあり、見知らぬ者同士が一つの教室で顔を合わせる新入生の気分を疑似体験できた。

4 まとめ

長年、学校教育とは異なる職場にいたので、どの講座内容も新鮮であり、実際の授業にすぐに役立ちそうな講座でありがたかった。生徒に力がつく魅力的な授業を目指そうという意欲が湧いた。また、研修を通じて他校の先生たちと交流できたことも大きな収穫だった。

高等学校道徳教育推進研修講座に参加して

教 論 小 川 卓 也

1. 概 要

日 時：令和4年6月10日（金）

場 所：秋田県総合教育センター

2. 研修内容

- ①道徳教育の今日的な課題と学習指導要領の改訂（講義・演習）
道徳の特別の教科化の背景、道徳教育の確認、高等学校における道徳教育等
道徳教育の充実に向けて
- ②道徳教育推進のための取り組み（実践発表・協議）
横手青陵学院高校、秋田工業高校の事例発表
- ③道徳教育の推進体制の充実（講義・演習・講義）
各校の道徳教育の特色や課題、道徳教育推進教師の役割等

3. まとめ

私は、公民科の教員として現代社会や公共の授業で道徳の内容を扱うこともあるが、研修を受けて改めて考えたことや感じたことを以下にまとめる。

1つ目は、義務教育を経ての道徳教育が目指すものを改めて認識できたということである。高校生にとっての道徳教育は、人間としての在り方生き方への根本的な問いから始まり、人生観・世界観、価値観を確立することによって主体的な生き方が出来ることを目指すものであるということである。そして、道徳教育は、具体的な指導をして終わるものではなく、その先の「実践」を伴うことを最終的なねらいとすることである。

2つ目は、振り返りの重要性を強く感じたということである。授業や特別活動等を通して道徳性を身につけさせたい場合、自分の体験したことを意味づけるとも振り返りの場面で重要な役割を果たすということである。自他の視点で振り返りを行い、意見交流という「実践」をすることが自己や他者を客観視する意味でも重要な役割を果たすものと考えられる。

現代社会は、携帯端末の普及や技術の発展により、必ずしも正解が一つとは限らない状況が増えつつある。このような社会においては、他者と協働する姿勢の重要性はますます高まるものと思われる。生徒たちの将来を考えた場合、道徳教育で重視されるのは「実践」なのではないか。この研修を通して感じたことは、生徒が学校生活全体で得られた経験は、他者と共有したり意見交換を行うことで、より適切な行動に向かう力を持つということであり、このような生徒を育成するための道徳教育が一層重視されるということである。

「授業に生かすデジタル教材の作成」講座を受講して

芸術(音楽)科 佐藤郁子

1 概要

期 日 令和4年8月2日(火) 10:00~16:15

場 所 秋田県総合教育センター(8名参加)

2 研修の目標

プレゼンテーションソフトの基本的な利用方法について理解を深め、ICT活用と授業におけるデジタル教材の作成力の向上を図る。

3 日程と内容

午 前：オリエンテーション、説明、パワーポイント(PW)を使った教材作りの実践

午 後：午前中の作業を完成させ発表、振り返り

4 感想

今回の講座のポイントは教科書をベースとしたデジタル教材の作成、授業のねらいを達成するために必要な教材として活用すること、著作権への理解と配慮ということで、PWならではの良さと自分の教科にとつてのPW教材の使用の必然性を考えるところから始まった。これは短時間では答えが見つかることではないので日頃から探究しておかねばならない課題であることを改めて実感した。

参加者のほとんどが小学校、支援学校の先生方だったので「見やすい」「わかりやすい」「楽しい」という、スライドのお手本のような教材をたくさん見せていただいた。具体的には文字の大きさ、配列、アニメーションの効果的な使い方などに工夫が見られ、大変参考になった。

私自身はあまりにも初心者なために、PWのどのような使い方をしたいのかもよく分かっていなかった、ということに現場で気づくような状態だったが、親切にご指導いただいたおかげで新しい知識を一つでも二つでも得ることができた。

授業ではクロムブックのスライドを使うことが多いが、デジタル教材作りについての基本は共通している。「音楽科ならではの効果的な使い方」とはどのようなことを考えるよいい機会になった。

「高等学校情報科におけるプログラミング」講座に参加して

商業・情報科 照井雅孝

1 研修講座の日程

- (1) 期 日 令和4年8月16日(火)
- (2) 場 所 秋田県総合教育センター 第1情報教育研修室
- (3) 日 程 9:15～10:00 受付
 10:00～10:10 〈オリエンテーション〉
 開講挨拶、日程説明等
 10:10～10:50 〈講義・演習〉
 小中学校におけるプログラミング教育
 と高等学校情報Ⅰの要点
 11:00～12:00 〈講義・演習〉
 情報Ⅰにおけるプログラミング①
 13:00～16:05 〈講義・演習〉
 情報Ⅰにおけるプログラミング②

2 研修内容

○ 〈講義・演習〉小中学校におけるプログラミング教育と高等学校情報Ⅰの要点
 新学習指導要領が令和2年度から小学校にて、令和3年度から中学校にて実施され、高等学校も今年度(令和4年度)から学年進んで実施されている。これに合わせて小中学校ではプログラミング教育も行われており、令和6年度には小学6年から中学3年まで4年間、プログラミングの学習を受けてきた生徒が高校に入学する形となる。
 情報教育の3観点には、ICTの基本的な操作、情報の収集・整理・発信などの学習による「情報活用の実践力」、プログラミング教育による「情報の科学的な理解」、情報モラルなどの学習による「情報社会に参画する態度」があり、この3本柱の1つとしてプログラミング教育が小中高において推し進められる重要なものであることを確認することができた。

○ 〈講義・演習〉情報Ⅰにおけるプログラミング①

「GoogleColab」を活用しPython プログラミングで、次の3つの基本的な制御構造のフローチャート(流れ図)どおりにプログラムを作成する実習を行った。

- ①「順次構造」のプログラム…文字を画面に表示するプログラム
- ②「分岐構造」のプログラム…条件により表示が分かれるプログラム
- ③「反復構造」のプログラム…定められた回数を繰り返し返すプログラム

○ 〈講義・演習〉情報Ⅰにおけるプログラミング②

次の応用的なプログラミングの実習を行った。

- ①リスト(データ)をもとに、最大値や最小値を計算するプログラム
- ②乱数を用いた変則的なプログラム
- ③タートルグラフィックスでさまざまな図形を描画するプログラム
- ④数学での関数や複利計算やローン計算に活用できるプログラム(グラフ化)
- ⑤統計学に用いられる度数分布(頻度分布)とヒストグラム、散布図と回帰分析など

< おわりに >

今年度から年次進捗で情報Ⅰが実施され、令和6年度からは小・中学校で4年間プログラミング教育を受けた生徒が入学することになる。少し不安や緊張感を持ちながらの研究であった。今回の研修を終えて、これからの生徒らにコンピュータは必需品であり、それを活用する上でのプログラミング教育の重要性を改めて感じることができた。情報Ⅰにおいて生徒らに「どのような内容」を「どのような教材」を用いて、「どのように」指導していくか、のヒントを得ることができた。今後も指導方法等について試行錯誤しながらよりよいもの導き出せるよう励んでいきたい。

4 本校普通科 デジタル探究コース の取り組み

本校普通科デジタル探究コースについて

デジタル探究委員会

1 はじめに

少子高齢化が進む本県において、デジタル人材の育成は急務の課題であり、昨年度12月に本校にて開催された「学校の活性化を考える会」でも、地元企業からデジタル系に強い人材の育成を強く要望された。

本校では、2年次より生活文化系とビジネス系のコースに分かれるが、ビジネス系において従来の情報処理や簿記の資格取得にプラスして、プログラミングの資格取得などを目標にし、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)の学生と連携できること、湯沢市にある「デジタル情報学研究所」、「ゆーとぴあネット」、「(株)ロイヤルパソコンシステム」、羽後町のNPO法人「未来の学校」からの支援などを得られることの強みを生かして、地元で活躍できるデジタル系に強い人材の育成を図ることとした。

2 学校設定科目・教科

普通科デジタル探究コースの設置にあたって、次の科目・教科を設定することとした。

・学校設定科目「デジタル情報」(3単位)

1年次には、「情報Ⅰ」の授業に加えて、「microbit」によるハードウェア制御、Edtech学習教材の「ライフイズテックレッスン」での問題解決スキルの学習などを行う。(2単位)

2年次には、長期休業中に外部講師によるプログラミングに関する講習会を実施し、Python 3 エンジニア認定基礎試験にチャレンジすることを目標とする。(1単位)

・学校設定教科「デジタル探究」(4単位)

1年次には、「総合的探究の時間(羽後学)」においてSFCの学生とのオンライン交流やオンライン留学(SFC留学)を行った。羽後町の特色や魅力を理解する際に、積極的にICT機器を活用して課題発見や解決策を考え、ICT機器を使った効果的なプレゼンができる能力を身につける。(1単位)

2年次には、1年次で身につけた能力をさらに高めるために、各自の興味・関心にもとづきグループ編成し、羽後町の歴史・自然・文化・産業等のテーマを設定して主体的に活動し、発表会にて発表する。(1単位)

また、2年次の夏期休業中にアカデミックインタナショナルシップを行う。(1単位)

3年次には、各自の進路実現を見据えた取り組みをしながら、上位の資格取得にチャレンジしたり、「羽後学」で1年次から取り組んだ内容を検証し、良かった点・反省点・課題・今後取り組みたいこと・進路実現との関わり等についてまとめ、1・2年生にプレゼンし、報告書を作成する。(1単位)

以上の科目・教科については、ビジネス系(デジタルビジネス探究コース)の選択者に対して科目・教科読み替えにより、「デジタル情報3単位」の科目認定と「デジタル探究4単位」の教科認定をする。

3 今年度(R4)の取り組み

(1) 日 時：5月20日(金) 6校時

テーマ：羽後学①「羽後学ってなに？(ZOOMの活用)」

講師：慶應義塾大学SFC 長谷部葉子研究会 学生5名 (オンライン)

内容：グループクロムや電子黒板を用いて、ZOOMでの接続のしかたと、オンラインで今年度の「羽後学」の活動内容についての講話。

(2) 日 時：6月14日(火) 5・6校時

テーマ：「建設業の仕事とドローンの活用について」

講師：(株)小野建設 小野 人平さん、
ほか従業員1名

内容：講話…建設業界におけるデジタル化の
進展についての講話。

体験…校庭にてドローンの操作体験
(すべての生徒が操縦体験をする)



(3) 日 時：6月17日(金) 5・6校時

テーマ：羽後学②「社会を知り、深めよう！」

講師：慶應義塾大学SFC

准教授 長谷部葉子先生、学生4名、

ゲスト：三菱U S J 銀行 白土昌健さん

(来校・SFCのOB)

東北芸術工科大学デザイン工学部

准教授 松田龍太郎さん (オンライン)

(株)Ay代表取締役 村上 采さん
(オンライン)



内容：ゲストの皆さんの体験談（社会にはどのような課題があるのか、その課題をなぜ発見したのか、その課題に対してどのようなアクションを起こし、今どうなっているのか、これからどのようにしていきたいか）より社会の現状等を知る。

(4) 日 時：7月8日(金) 6校時

テーマ：羽後学③「ライフラインシート(人生グラフ)から」

講師：慶應義塾大学SFC 学生1名(来校)、学生4名(オンライン)

内容：グループに分かれて、生徒各自の過去と未来のライフラインをもとに、大学生とカウンセリングしながら、今後の方向性を探る。

(5) 日 時：7月21日(木) 5・6校時

テーマ：「実際の建設現場でのドローンの活用の見学」

講師：(株)小野建設 小野 人平さん、他数名

内容：羽後町にある解体作業中のゴミ処理場にて、ドローンの活用風景を見学。



(6) 日 時：9月9日(金) 5・6校時

テーマ：羽後学④

「インタビューにより質問力や表現力、要点をつかむメモ力をつける」

講師：慶應義塾大学SFC 学生3名(来校)

内容：ウェブアプリのkahooによるクイズに答える。大学生の自己紹介に対して質問をしたり、メモを取ったりする。生徒同士でインタビューをし合い、自己表現力や質問力、要点をまとめる能力を身につける。

(7) 日 時：10月14日(金)午後
15日(土)午前

テーマ：「eスポーツの現状と実践」

講師：デジタル情報学研究所

佐々木 訓さん 他4名

内容：「eスポーツはスポーツか」、

「参加(観戦)するe sports」、

「仕事するe sports」の講義を聴いたり、本校の文化祭にてe sports大会を企画・運営し、機材の設置準備から各ゲームや機器の操作の説明などを行った。



(8) 日 時：10月18日(火) 5・6校時

テーマ：「インターネットの世界について」

講師：デジタル情報学研究所

高橋 一俊さん 他1名

内容：「ITパスポートエッセンシャル」、

「すべての社会人が備えておくべきITに関する基礎知識」、「インターネットの世界」、「情報モラル(情報倫理)について」の講話を聴いた後、インターネット配信を実際に体験した。

(9) 日 時：10月28日(金) 5・6校時

テーマ：羽後学⑤「チームで楽しむ力をつける」

講師：慶應義塾大学SFC 学生3名(来校) 学生4名(オンライン)

内容：アイズブレイクとして、指示に従ってジェスチャーをするゲームや、チームに分かれてお題にあったポーズを決めるゲームを行った。次に「住みたい町」についての問題をカフポートで作成。11月に行われるSFC研修のテーマについて考えた。



(10) 日 時：11月1日(火) 5・6校時

テーマ：「WEBサイトの構成とデザイン」

講師：デジタル情報学研究所

飛塚 嗣さん 他1名

内容：「WEBサイトの役割」、「WEB

サイトを見てもうためには」、

「制作するWEBサイトの目的とコンセプトを考えよう」の講話を聴いた後、ユーザー登録してWEBサイトを作成したり、WEBサイトを公開するための手続きを学習した。

(11) 日 時：11月4日(金) 6校時

テーマ：羽後学⑥

「チームで楽しむ力をつける 2」

講師：慶應義塾大学SFC 学生2名(来校)

学生4名(オンライン)

内容：体育館にて、チームに分かれ「指示に従えアトラクションゲーム」や「シャッターチャンス」というインプログゲームを行った。



(12) 日 時：11月 9日(水)1～4校時、

10日(木)3～6校時、

11日(金)1～3校時

テーマ：SFC研修

「羽後町劇場 ～発見！私たちの町～」

講師：慶應義塾大学SFC

准教授 長谷部葉子先生

学生7名(来校)、他オンライン参加

内容：9日(初日)は、「羽後町(地域)を知る」ということで、「良い町とはどんな町



のことなのか」をテーマに、事前にアポイントメントをとってある町内の方々の所に向いて直接インタビュアーをさせていただいき、まとめたものを共有し合った。



10日(2日目)は、「町について考える、自分について考える」をテーマに、前日の内容を踏まえて自分が考える「良い町」を考えたり、グループ内で各自の考えを共有したりしながら、みんなにとって良い町に必要な要素を考ええた。

11日(最終日)は、グループのみんな考えた「良い町」についてを、グループごとに寸劇にして発表した。発表会には初日にインタビュアーした町内の方々も招いて、発表会後にそれぞれに感想等もいただいた。

(13) 日時：11月18日(金) 5・6校時
テーマ：羽後学⑦

講師：SFC研修の振り返りをし、将来の暮らし方と働き方について考える」

講師：慶應義塾大学SFC 学生2名(来校)、学生5名(オンライン)

内容：SFC研修時に頑張ったこと、挑戦できたこと等を共有し合う。また、将来の羽後町について考えながら、自分は将来どこで、何をして生きていきたいか等を考え発表した。

(14) 日時：12月13日(火)

5・6校時

テーマ：「メタバース」

講師：デジタル情報学研究所

高橋 一俊さん 他1名

内容：「メタバースとは何か」、「メタバースは今がタイムミッド」、「国家戦略としてのメタバース」、「コンテンツ

ツ大国日本の強み」の講話を聴き、実際に仮想空間のアバタを取り、アバタを操作するなどの体験をした。



(15) 日時：12月16日(金) 6校時

テーマ：羽後学⑧

「羽後学で挑戦してみたいこと、明日からやってみたいことを考えよう」

講師：慶應義塾大学SFC

学生4名(来校)、他5名(オンライン)

内容：これまでの活動のもと、自分が抱く



夢や理想の実現に向けて、何をやる必要があるのか、何をしたいか、そして近い将来である2年生羽後学において、何に挑戦してみたいか、明日からやってみようか、を大学生との対話を通して考えた。

(16) 日 時：12月22日(木)

・23日(金)

テーマ：「プログラミング講座」

講師：株式会社テクノス秋田

浅石 宏明さん

内容：「Google Colaboratory」

ソフトにより、Python言語を

使用した初心者向けのプログ

ラミングの演習。

基礎編では、「プログラミ

ング言語とは」、「条件分岐と

は」、「変数とは」、「乱数とは」、「繰り返し処理とは」などを学習し、それぞれにプログラムを作成した。応用編では、「ガロンボトル」のクイズにチャレンジしたのち、実際に「ガロンボトル」のプログラムを作成、実行と検証を行った。



(17) 日 時：1月20日(金) 6校時

テーマ：羽後学⑨「最終発表に向けて、準備をしよう」

講師：慶應義塾大学SFC 学生1名(来校)、学生6名(オンライン)

内容：2月17日に行われる発表会に向けて、これまでの活動についてGoogle スライドで次の①～④の内容をまとめた。また、他の表現方法(演劇・動画・音楽など)も考えた。①これまでの羽後学・SFC研修の学びについて

②自分はどこで、何をして生きていきたいか

③そのために2年次の羽後学でどんなことに挑戦していきたいか

④自分の強み・長所

(18) 日 時：1月23日(月) 5・6校時

テーマ：「デジタル社会を生きるために」

講師：ジャーナリスト 池上 彰さん

(オンライン)

内容：現在の日本のデジタル化の状況、

デジタル化の良い点や課題、今後

のデジタル社会の予測、これからの私たちに必要な能力、などを我々の身近にある実際の例をもとにしたお話を伺った。



(19) 日 時：2月3日(金) 6校時

テーマ：羽後学⑩「最終発表に向けて、準備をしようII」

講師：慶應義塾大学SFC 学生3名（来校）学生4名（オンライン）

内容：発表会に向けて、各生徒の発表方法と発表の流れを決定し、内容について大學生と相談しながら完成に近づけた。なお、①の羽後学・SFC研修についてはスライドで発表し、②③④についてはどのような表現方法でも良いこととした。

スライドのみで発表が13名、楽器演奏を含めての発表が4名、カフートによる発表が4名、動画による発表が3名、俳句を含めての発表が1名となった。

(20) 日 時：2月17日(金) 5・6校時

テーマ：「1・2年生による羽後学発表会」

講師：慶應義塾大学SFC 准教授 長谷部葉子先生、学生6名（来校）、
学生数名（オンライン）

内容：5校時は1年生の発表、A班・B班の2つに分かれて、1人3分程度で発表の付箋を貼った。聞き手は発表の都度、ジャムボードに良かった点や課題・改善点などの付箋を貼った。最後に大学生より講評等をいただいた。

6校時は2年生の4つのグループによる発表を聴いた。各グループの発表内容は、①羽後町の観光スポットについて、②羽後町の福祉や福祉施設について、③羽後町のPR活動について、④羽後町の歴史についてであった。生徒らは今年度の羽後学の学習内容を、来年度どのように深めたらよいか等、参考になったようだ。

4 今年度の活動を振り返って

本校では、急速に進んでいるデジタル社会の中でソフト面・ハード面問わず、臆することなくデジタルに関わるさまざまな知識や技術等を身につけることができるように、また、ちよとした興味関心をもとに、小さな成功体験を積み重ねながらデジタル系に強い人材を育みたいと考え、各講座を計画し実施してきた。

「デジタル探究」は、羽後学を通して慶應義塾大学SFCの長谷部先生をはじめとして大學生の皆さんにご協力をいただきながら活動してきた。生徒らは最初の講座で、オンラインの講座に欠かせないZOOMソフトの使い方について指導していただいた。その後の講座でも常に大學生とオンラインでやりとりをしながら、少しずつ活動を深めた。2月に行われた発表会では、さまざまなソフトを巧みに使い、発表や相互評価ができるようになった。

「デジタル情報」では、地元の企業等の協力のもと、生徒らの好奇心・興味関心を示そうな「ドローン」、「インターネット」、「動画配信」、「メタバース」などをテーマに講義と体験実習を組み合わせて実施した。また冬期休業中に実施した「プログラミング」の講座でも、生徒らがスムーズに取り組めるように基礎的な内容から応用的な内容へと講義・演習を実施した。

デジタル探究の初年度、日々講座内容について講師をしてくださる慶應義塾大学SFCの学生や地元企業の方々と話し合いながら活動を進めてきた。生徒らは、どの講座

の講義や体験・実習に対しても常に新鮮な気持ちで臨み、大なり小なり刺激を受け、将来に向けて前向きな感想を述べてくれた。企画運営する側の我々がゆとりをもって1年間で見通した企画・計画ができず、生徒にとって物足りない部分が多々あったように感じた。また、今年度購入したデジタル機器・教材を活用した講座を開催することができず残念であった。来年度以降は、このような反省・課題を踏まえてより具体的に活発な充実した活動ができるよう励みたい。

2023. 6. 20 秋田さきがけ新聞 掲載記事より

地域

2022年(令和4年)6月20日 月曜日 秋田 田 子



ドローンを操作する生徒

ドローン操作「難しい」

1年生 業者から活用法学ぶ

羽後町の羽後高校 平山研 社長40と同社土木事業部の 宇戸隆課長38が講師を務め、仕事内容や建設業でのドローンの活用方法を紹介。ドローンの空撮などを現場の地形などを3次元で把握でき、平面図より施工後イメージしやすいのが利点 など説明した。

14日に同校で実施。小野建設(同町新町)の小野全副社長らからドローンの操作



ドローンで記念撮影もした

を体験。高さを保って真つすぐ飛ばしたり、着陸させたりするのに苦戦しながら、5分ほどの距離を移動させた。最後はドローンのカメラを使い、全員で記念撮影をした。

初めてドローンを操作したという阿部香琳さんは「難しかったが、長い経験になった。ドローンへの関心も高まった」と話した。

羽後高では本年度の1年生から、2年次にデジタルビジネス探究コースか「生活文化コース」のどちらかを選択する。1年生向けに外部講師を招いてデジタルビジネス探究コースの内容に関する講演や体験学習を数回行う予定で、今回が1回目。(渡文香)

編集後記

令和4年度、新型コロナウイルス感染症も国や県の対策が功を奏し、少しずつ感染者等が減少してきました。校外での協議会や研修・講習会等は、便宜的なことかオンラインによるものもありましたが、現地での対面によるものも増えてきました。またここ数年のコロナ感染防止対策のお陰で、授業や家庭での学習におけるICT機器（クロムブックや電子黒板等）の使用頻度もますます増えてきており、どの教科・科目でも活用され、生徒らも十分に使いこなせるまでになってきました。

ICT機器の活用については、今後も各教科において研究・研修に励まなければいけませんし、授業以外での活用（オンラインによる講習会や保護者対応等）についてもさまざまな活用ができると考えられます。活用事例などに関する研修・講習会等も頻繁に行われていますので、おおいに参加して活用技術・能力を身につけていきたいと思っています。

最後に、この「研修集録」が今後の教育活動の一助となれば幸いです。

令和4年度 研修図書・情報部

令和4年度

研修集録

発行 令和5年3月
秋田県立羽後高等学校